

原 著

スクールソーシャルワーカーの視座とかわりに関する実践分析(1)

—学校現場への視座とかわり—

岩永 靖・茶屋道拓哉¹⁾

A practical analysis of the perceptions of school social workers in school environments

Yasushi Iwanaga & Takuya Chayamichi

本研究は、学校現場に社会福祉専門職として導入されたスクールソーシャルワーカー (SSWr) が学校現場をどのように捉え、どのような実践知・技術を活用してきたかを把握するために行われた。SSWr10名に個別インタビュー (半構造化面接) 調査を行い、質的研究法に従って分析を行った。その結果、「学校現場に対するSSWrの視座」では《教育と福祉の視点》、《教育組織の文化・価値観》、《教師の疲弊と抱える課題》、《組織機能の支援への影響》、《急激な社会変化と学校の役割》、《スクールソーシャルワーク活動体制の課題》のコア概念が抽出され、「学校現場に対するSSWrの実践知・技術」について、《教師との協働》、《ファーストクライアントとしての教師・学校》、《校内状況と社会資源の把握》、《ソーシャルワークを伝える》、《アセスメントの共有化》、《カウンセリングスキル》、《基盤となるソーシャルワーク実践知識・技術》のコア概念が抽出された。これらのことからSSWrは学校現場の特質や課題に対し、協働の視点でかわり、ソーシャルワークの視点を重ねていくことで子どもたちの環境である学校現場の変化・エンパワメントを促していることが明らかになった。

キーワード：スクールソーシャルワーカー、学校現場、実践知・技術、質的研究

1. 緒 言

2008年度より文部科学省において「スクールソーシャルワーカー活用事業」が導入され、全国各地域で社会福祉専門職などがスクールソーシャルワーカー (以下、SSWr という) として配置された。アメリカでは20世紀初頭よりスクールソーシャルワーク (以下、SSW という) 活動が展開されている (半羽2008)。わが国では埼玉県所沢市での先駆的实践 (山下2003a) にはじまり、香川県 (浜田2005)、大阪府 (山野2009)、での取り組みが知られているが、その歴史は比較的浅い¹⁾。熊本県においては2007年度より文部科学省の「問題を抱える子ども等の自立支援事業」の一環として、独自の「スクールソーシャルワーカー配置事業」によるモデル配置を決定し、全国的な配置より先駆けて活動が行われている。本研究は、熊本県におけるSSWrの実践経験を丁寧に振り返り、

SSWrが学校現場をどのように捉え、かわりを持ってきたかを明らかにする。そこに生ずる課題や根底にある実践知・技術を分析することで、この地域におけるSSWrの活動の指針づくりやSSW実践の基盤整備の一助とすることを目的とする。なお、本研究は後出の「スクールソーシャルワーカーの視座とかわりに関する実践分析(2) —子どもや家庭への視座とかわり、価値観—」と連動して行われた。ここでは、「学校現場に対するSSWrの視座」「学校現場に対するSSWrの実践知・技術」についての分析と考察を行う。

2. 問題と目的

ソーシャルワーカーは社会福祉専門職であるが、福祉機関だけでなく、他分野領域で活動してきた。医療ソーシャルワーカーは医療領域でクライアントを生活者として捉え、権利擁護を専門職の基盤とし様々な生活問題に関する支援を行ってきた。

¹⁾ 九州看護福祉大学看護福祉学部

また医療の中に生活モデルの視点を持ち込み、医療と協働した生活支援を実践してきたといえる。

濱田(1993)は、学校教育の社会的機能を、子どもの教育における変容と国家レベルの社会統制の関係に位置づけ、①社会化機能、②選別・配分機能、③正当化機能の3つの枠組みを提示している。また水本(1993)は、学校の公共性の一面として、公権力の関与をあげ、狭義の教育権を親の教育権、教師の教育権、国家の教育権としている。山下(2003b)は、社会における学校教育の効用が、子どもたちを生活者として捉える視点を希薄にしたとしている。

また、門田(2010)は、わが国の歴史的な学校教育文化として「抱え込み」意識をあげ、久富(1995)は、教師多忙の特性につながる内在的特質として、①教師の仕事の内容・過程の不確定性と未達成感、②教職のアイデンティティ確保にかかわる不安定性とバーンアウトをあげている。

このように、学校組織は固有の社会的機能を有し、学校教育文化という特質を持ち、教師特性によって構成される組織である。

このような学校組織とソーシャルワーク実践の関連について、半羽(2006)は、「学校は教育現場独自の価値観、方法論、目標を保持しており、必ずしもソーシャルワークのそれとは合致しない」とし、「学校はソーシャルワーカーに活動の場は提供するものの、ソーシャルワークがどのようなものであるかを理解している社会福祉関連の職場で活動するものとは大きな違いがある」としている。また西野(2008)は、SSWr活動における課題として「〈学校文化〉という壁をいかに乗り越えるか」を指摘している。山野(2006a)は、「スクールソーシャルワークを形成するには、社会福祉の価値、理念をもちながら、学校組織に共感と緊張を持ちあわせて介入し、教育行政と共に3つのレベル²の協働をつくり上げていくことが必要であろう」とし、西野(2009)は、虐待養育環境にある子どもに対する配置校型SSWrの援助プロセスを明らかにし、SSWrの校内での立場の確立について言及している。このように学校現場の特質とSSW 定着への課題について様々な報告・研究がなされてきている。このようなか、

SSW 実践を振り返り、SSWrが学校現場をどのように捉え、かかわってきたかを明らかにしていくことは、学校現場と協働し、効果的な支援体制を構築していく上での重要な課題であり、本研究はその一助になると考える。

3. 方 法

対象となるSSWrが職域として未成熟な分野(特に対象となった地域では2008年度より本格実施)であるため、その新しい構造を明らかにする必要性や、対象となるSSWrが少数であること、回答に際してその地域的特徴、対象者の経験、状況といった特殊な条件の影響を強く受けるため、質的研究の方法を採った。質的研究法に基づいて本研究を遂行するにあたって、先に述べた研究の目的に沿い、個別インタビューを行うこととした。インタビューは半構造化面接とし、その骨子は、学校現場へのかかわりに対し、①「印象や困ったこと」、②「配慮や活用した実践知・技術」についてであった。なお、インタビュー時間はそれぞれ60分程度、インタビュー期間は2009年11月～12月であった。

インタビューで得られた音声逐語録としてデータ化し、対象者が語っている内容の意味を解釈しながらデータを読み込んだあと、インタビューの目的に沿ったデータを抽出しつつ、そのデータの意味を表現するラベルをつけ(1次コーディング)、さらにそのラベルの中からいくつかの集団を作る中で抽象度を高めつつ上位の概念を示し(2次コーディング)、帰納的推論を繰り返す中で、最終的に語りの中から得られた本質的命題(現象に一貫して存在する概念:コア概念)を抽出した。

4. 研究対象者の特徴

熊本県内でSSWrとして勤務する10名を対象者とした。10名のSSWrは、女性9名、男性1名であった。全ての対象者はソーシャルワーカーとしての経験が3年以上あり、社会福祉士または精神保健福祉士の国家資格を有している(両方の資格を有する者もいる)。なお、各対象者は教育事務所または教育委員会に配属され、1か所もしくは2か所に配属されている。1週間の勤務は各

所属する組織で異なるが週1日から週3日となっている。

5. 倫理的配慮

本研究（インタビュー調査）を実施するにあたり、研究対象者に口頭と文書で研究の主旨、目的や方法について説明した。自由意志での参加であ

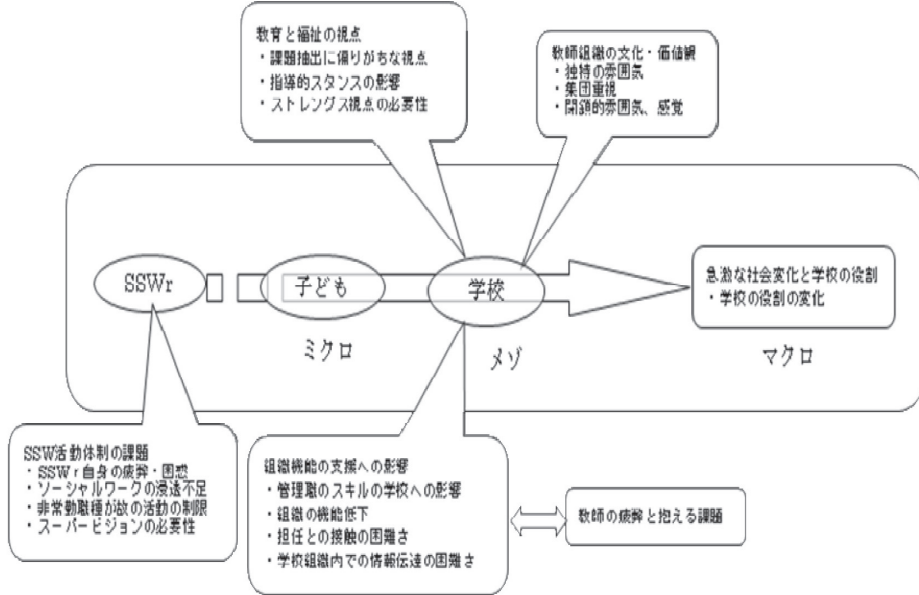


図1 「学校現場に対するSSWrの視座」に関する概念構造図

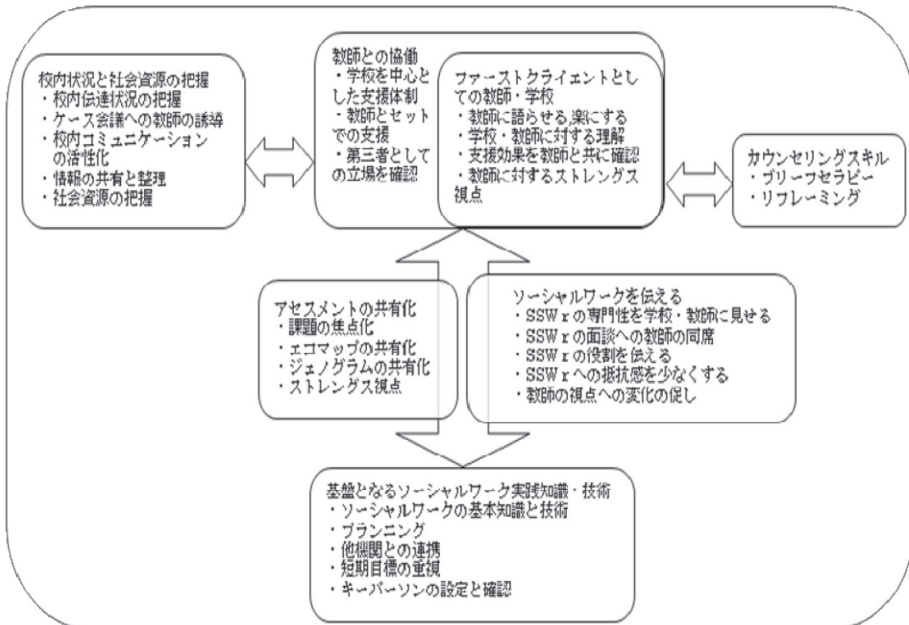


図2 「学校現場に対するSSWrの実践知・技術」に関する概念構造図

り、不参加による不利益を被らないこと、研究に同意しても途中で断ることができること、守秘義務、匿名性の保証、データの保管、研究中・終了後の対応方法などを説明した。同意書を作成し、対象者と研究者が署名捺印し、2部作成の上、双方保管することとした。これらの手続きを経てからインタビューに着手した。

6. 調査結果

分析の結果、「学校現場に対するSSWrの視座」について図1、「学校現場に対するSSWrの実践知・技術」については図2のような概念構造図が得られた。また、各項目の分析の結果を以下(6.1～6.2)に示す。表記については、《 》: カテゴリ(コア概念)、〈 〉: サブカテゴリ(2次コード)、「 」: 対象者の語り、[]: 補足としている。

6.1 「学校現場に対するSSWrの視座」について

この項目については、《教育と福祉の視点》、《教育組織の文化・価値観》、《教師の疲弊と抱える課題》、《組織機能の支援への影響》、《急激な社会変化と学校の役割》、《SSW活動体制の課題》の6つのカテゴリ(コア概念)が抽出された。また、それぞれのカテゴリに付随するサブカテゴリは表1に示すとおりである。

《教育と福祉の視点》は、「先生たちも、『この子はそういえばこんなところは良かったんだ』とか後から出てくるんですけど、やっぱり最初の見方っていうのは『あれもだめ、これもだめ、困ったこの子がいるだけで[クラス運営が難しくなる]』っていう様などころからまず始まるんですよ」とあるように、教師自身の元来保有している視点とSSWrの持つ視点の違いからくるものである(指導と支援)。SSWrと教師が接点を持つ中で、教師の視点に変化や別の視点が加わることで、より子どもへのかかわりが多様になってくる。そもそも、SSWr(精神保健福祉士や社会福祉士)になるために培われてきた知識・技術・価値観や、その資格が保持する社会的責務と、教師のそれとは異なるものである。視点の違いがあるのは当然であり、双方が捉えた子どもや家庭などに対する視点を重ね合わせていく中で、その本

質的な課題が見えてくると考えられる。

《教育組織の文化・価値観》は「子ども[を中心とした個別支援]と言うよりも、そういう[集団重視や縦社会の]システムとか、培われてきた文化みたいなものに、添おうとしているような印象がすごくなる」という語りなどから抽出された概念である。様々な組織によって保有する文化や価値観は多様である。しかし、義務教育課程での対象はいわゆる「子ども」である。大人社会の文化や価値観が直接・間接的にこの子どもたちに与える影響は注意して見守っていく必要がある。

《教師の疲弊と抱える課題》は、多くのSSWrの語りの中から抽出されたものである。「先生たちが忙しくて、こちらから[改善のための]いろんな提案をすることがしづらい」、「子どもの権利と違って[さらなるかかわりの]お願いをするんだけど、向こう[(先生)]からしたら、[仕事を増やすような]そんなことばかり言われるんだったら・・・と思われるんじゃないか」などに表れるように、学校現場に介入し、現場と教師の多忙やそれに伴う疲弊を知ることで、「協働したいが、できない(言い出しにくい)」というディレンマを抱えている。

《組織機能の支援への影響》は、「担任の先生の話を直接うかがいたい。[管理職を通すと]事実が変わって相互に伝わってしまうことがある」といった、上述したような教師の多忙に伴う〈教師の疲弊〉と大きくかかわる部分である。多くの場合、不登校や課題を抱えるケースの学校側の窓口は管理職(校長や教頭)であるが、SSWrは可能な限り、直接的に子どもや家庭に関わっている人と接点を持つとする。しかし、そこでの窓口としての機能を管理職が果たすときに、彼らの主観としてのある種のフィルターを通過し、変容した事実が伝わることで発生する困難である。また地域によっては主に養護教諭が窓口となり、SSWrと直接連絡を行い、状況を管理職へ報告をすると形をとっているところもある。そのことにより、身近な状況の把握と子ども及び家庭へのつながりも容易になっている。校内のコーディネート、マネジメント体制のあり方としての今後の課題でもある。

《急激な社会変化と学校の役割》について、あ

るSSWrは以下のように述べている。「[現代の子どもたちは]学校に行かなくても知識は豊富だし、標準語っぽい話し方もできる。[昔は]今みたいに一人一人テレビを持ってる時代ではなかったの、情報を得るところがなかった。でも今は携帯[電話]があり、インターネットがあり、本もある。[学校に来なければ始まらない、情報が得られないという]その絶対的なものっていうのをやはり学校の先生たちはそのまま引きずっている気がする。『学校が絶対的なものではないよ』っていうメッセージを子どもたちが伝えているにも関わらず、学校が[変容せずに]そのまま存続している」一方で、学校としての本質、つまり学校が本来持っている社会的役割・使命も当然だろう。社会の変化と元来有しているこれらの中で学校が揺れ動き、そこにSSWrの役割が発生しているのかもしれない。

《SSW活動体制の課題》はSSWrの活動に大きな影響を与えていることが明らかになった。対象であるSSWrの多くは単独での配置や、2名配置の場合でも相互の活動日程が重複することがほとんど無い（重複しても活動時間内は学校や家庭へ出向くことで相互のコミュニケーションが図られにくい）。さらに、多くのSSWrに投げかけられるケースは、学校現場で努力し、子どもや家庭と一生懸命かかわってきてもどうにもならなかったケースや、解決の糸口が見えなかったケース、多問題を抱えるケースなどである。その活動の中で「燃え尽きそうになる。無力だなあって思うことがいっぱいあります。結局、何にも出来てないと思って。なんかもっとやりたいこととか、やれることもあるだろうに…『もしかして私が担当したのも運が悪いんじゃないか』って、違う誰かだったら上手くいったんじゃないかって思ったりするんですよね。でも多分、みんなあると思うんですよ。個で動いてるから。人と話しをすると、まあ、なんとか元気にはなるんだけど、やっぱりどう動かしても動かない山が目の前にあると、なんか、悲しくなります」とあるような不安全感や自己嫌悪にも似た感情を抱えている。それに対し、「なにかが困っているのか[自分で]語れる。クライアントに語ってもらえるように。私たちもクライアントなんだっていう考え方ですね。『私の支

表1 「学校現場に対するSSWrの視座」のカテゴリ（抜粋）

《カテゴリ》	《サブカテゴリ》
《教育と福祉の視点》	《課題抽出に偏りがちな教育の視点》 《教育と福祉の視点の違い》 《指導的スタンスの影響》 《ストレングス視点の必要性》
《教育組織の文化・価値観》	《独特の雰囲気》 《集団重視》 《閉鎖的雰囲気・感覚》 《不登校規定による弊害》 《学校としては困っていないケース》
《教師の疲弊と抱える課題》	《教師に対する縛りの強さ》 《教師の疲弊》 《教師の抱える課題》
《組織機能の支援への影響》	《管理職のスキルの学校への影響》 《形骸化しがちなケース会議》 《組織の機能低下》 《開かれた学校》 《担任との接触の困難さ》 《学校組織内での情報伝達の困難さ》 《学校組織内での関係形成の困難さ》 《SSWrの介入に関する学校間の格差》
《急激な社会変化と学校の役割》	《学校の役割の変化》 《学校以外の代替サービスの不足》
《SSW活動体制の課題》	《SSWr自身の課題》 《SSWr自身の疲弊・困惑》 《ソーシャルワークの浸透不足》 《非常勤職種が故の活動の制限・困難》 《ネットワーク作りの困難さ》 《スーパービジョンの必要性》

援の仕方はよかったのかな』っていう振り返り、スーパービジョン体制っていうのをきちんととっていけば、出来ると思いますので」とあるように少人数で活動が行われる専門職種が故にスーパービジョン体制の構築を求める声も見られる。

図1に示したように、SSWrは学校現場でソーシャルワーク実践をしていく上での困難さの要因として、視点の違い、学校現場の特質や課題（学校文化、組織、教師の疲弊）などをあげ、急激な社会変化や《SSW活動体制の課題》がさらなる困難さを生みだしていると感じていることが明らかになった。このことはミクロレベルの子どもの抱えている課題に向き合いながら、その背景にあるメゾレベルの学校、マクロレベルの社会の課題へと視点が向かっていると考えられる。

6.2 「学校現場に対するSSWrの実践知・技術」について

この項目については、《教師との協働》、《ファー

ストクライアントとしての教師・学校》,《校内状況と社会資源の把握》,《ソーシャルワークを伝える》,《アセスメントの共有化》,《カウンセリングスキル》,《基盤となるソーシャルワーク実践知識・技術》の7つのカテゴリ(コア概念)が抽出された。また,それぞれのカテゴリに付随するサブカテゴリは表2に示すとおりである。

《教師との協働》では,「[ケースにもよるが,直接的なかわりを持ってきた]担任と一緒に動きたい。実際にやはり一緒に定期的に動くのは,担任の先生は本当にベストだと思う」という導入時点での情報共有や,先に述べた視点を重ねる意味でもこの取り組みは重要と考える。さらに,「こっち[SSWr]が全部問題解決するんじゃないで,やっぱり学校と一緒にしていかないと。子どもたちが帰るのはSSWrのところに戻るのではないので。だから学校を必ず真ん中に置くようにしています。例えば子どもと連絡をとるとか,保護者と連絡をとる時に,私の携帯[電話]を教えると早いですけど,あえてそれをして。学校から親に連絡してもらおう。例えば,大きな会議とかケース検討会っていう形ではなくても,常に学校は真ん中に置いて,連絡は面倒くさい遠回りなことをやっています」に見られるようにSSWrの支援が終わった後のことも視野に入れた学校のエンパワメントに対する視点も見受けられる。

《ファーストクライアントとしての教師・学校》という捉え方をSSWrは行っていることが明らかになった。困難なケースをSSWrに開示するとき,「きちんと今まで対応して頑張ってきて,つらい思いを[しながら],先生自身も一生懸命やってきた事に対してきちんと理解をして,あなたが悪かったわけじゃないんだという風に理解を示しています」というようにファーストクライアントとして教師に対する受容的・肯定的なかわりで支援を始めている。さらに,「間接的な学校の先生たちへの支援っていうものがないと。学校の先生たちを支援して豊かになってもらわないと,子どもたちがなんか置き去りにされてしまう」など学校に対する支援が,結果として子どもや家庭への効果的なかわりに繋がることを考えている。

《校内状況と社会資源の把握》は,SSWrが学校配置でないため各学校の状況把握に乏しいことの表れである。「[学校で行われている]行事は聞くようにして,先生が動きやすい環境を整えるということを気にかけています」とあるように,校内状況への気付きを持つことで学校だけでなく子どもの動きにも目配りがなされていることがうかがえる。また,「[コミュニケーションの苦手な校長に対して]『これは養護の先生に先生の方からお伝え願いますか?』っていう様に伝える。『私よりもいい知恵がえられるかもしれません』とか言いながら」など,校内のコミュニケーションを活性化させるような働きを行っていることが明らかになった。さらに,「それぞれの先生たちがそれぞれ[情報を]持ってるんですけど,それを整理ができてないっていうことがあるので。それを整理すると課題が明確になってくるので,先生方がまずすっきりされますね」というように校内の情報を整理し,記録化していくことも効果的な活動であることがわかる。

《ソーシャルワークを伝える》という部分では,新しい職種が学校に介入する際に生じる困難への対処でもある。よく比較されるのがスクールカウンセラーであるが,「学校側の見方として,『SSWrはよく動くけど,カウンセラーは動かない』というのがある。[一つの側面だけを見て誤った認識を持っているので],それぞれ役割が違うんだっていう話をするんですね」と役割の違いを伝え,「対立した存在ではないので,『カウンセラーがこんな専門職で,私は福祉の専門職で全然違う。視点も私たちは環境に[中心をおく]』っていうことも言ってます。」とあるように,他の専門職との違いや,違いがあることの重要性,ソーシャルワークの必要性を伝えることを意識して行っていることがうかがえる。

《アセスメントの共有化》では,「きちんと情報整理して,[課題を捉えるときに]『どういった情報が必要なんです』というように,先生たちに伝えるような力っていうのは必要」というようなSSWrの視点(例えばストレングス視点など)を重ねることや情報整理であったり,「[情報や課題を]アセスメントシートとかに落とすと,結構課題が明確になる」というようにツールを共有化し

ていることもうかがえる。さらに、「[対象者の]エコマップをみて、自分たちが出来ることとかがついでというのが[分かって]、先生たちが変わってきましたね」とあるようにジェノグラムやエコマップを教師とともに作成したり、支援経過にあわせて確認していく中で、共通の理解や新しい見方を相互に得られる側面も見受けられた。

《カウンセリングスキル》では、「先生たちと話して、解決志向の頭を持っていくというか、その力量が必要。いかに会話を通して、ケース会議をしながらでも、解決志向に話し合いをもっていく作業がすごく難しい」と解決志向の技術の重要性を訴えている。また、「お父さんが無職であるという事例で、『お父さんが怠け者で』って[教師側が捉える]。でも、『学校に送り迎えは出来るじゃないですか』って伝えると。あ、『そんな考え方もあるんですね』って言われる」とリフレーミングすることで教師の視点の変化に加え、負担感の軽減に寄与していることも分かった。またブリーフセラピーなど長期化させないための取り組みも見られている。

《基盤となるソーシャルワーク実践知識・技術》では、例えば、「今まで、医療と地域と産業と[でソーシャルワークを行ってきた]、今回教育なんですけど、その意味では医療だからとか教育だからって使い分けてることはあまりないと思うんです」に表れるように、SSWrとして特徴付けられるものとしてだけでなく、そもそもソーシャルワーカーとして共通する実践知識・技術は同じであることとして抽出されている。また、「お互いの相互作用を利用するということですね。グループの力を利用しながら。で、ワーカーはやっぱりグループワークができないと、私はできないと思うんですよ。グループワークをすることによっていろいろな視点、いろいろな人の立場に立ってものを見たりとか、いろんな考え方をどのようにまとめていくとかをすごく学ばされるので、切っても切り離せない」とケース会議の場面における集団に働きかける力や、その相互作用・集団力動を見る力の重要性が挙げられている。

図2に示したように、SSWrは学校現場で実践していく上での実践知として、まず他分野でも共通する《基盤となるソーシャルワーク実践知識・

表2 「学校現場に対するSSWrの実践知・技術」のカテゴリ（抜粋）

《カテゴリ》	《サブカテゴリ》
《教師との協働》	《学校を中心とした支援体制》 《教師とセットでの支援》 《第三者としての立場を確認》
《ファーストクライアントとしての教師・学校》	《教師に語らせる》 《学校・教師に対する理解》 《教師を楽にする》 《支援効果を教師と共に確認》 《傾聴・拝聴の姿勢》 《教師に対するストレス視点》
《校内状況と社会資源の把握》	《校内情報伝達状況の把握》 《ケース会議への教師の誘導》 《校内コミュニケーションの活性化》 《事前の根回し》 《情報の共有と整理》 《社会資源の把握》
《ソーシャルワークを伝える》	《SSWrの専門性を学校・教師に見せる》 《SSWrの面談への教師の同席》 《SSWrの役割を伝える》 《SSWrへの抵抗感を少なくする》 《教師の視点への変化の促し》
《アセスメントの共有化》	《アセスメントする力》 《課題の焦点化》 《エコマップの共有化》 《ジェノグラムの共有化》 《ストレス視点》
《カウンセリングスキル》	《カウンセリング技術》 《ブリーフセラピー》 《リフレーミング》
《基盤となるソーシャルワーク実践知識・技術》	《ソーシャルワークの基本的知識と技術》 《プランニング》 《モニタリング》 《他機関との連携》 《短期目標の重視》 《キーパーソンの設定と確認》

技術》がある。だからこそ、専門職の配置が必要で、その《ソーシャルワークを伝える》こと、共有していくことで《教師との協働》を図り、《ファーストクライアントとしての教師・学校》のエンパワメント、校内状況の改善を促していることが明らかになった。

7. 考 察

本稿の主眼はSSWrの実践経験を丁寧に振り返り、SSWrが学校現場をどのように捉えてきたかを明らかにし、そこにおける実践知・技術を分析することであった。

明らかになったことはメゾ、マクロな視点を意識していることであった。

SSWrは、学校分野という新たな領域のなかで、

学校現場の特質によるかかわりの困難さを感じていた。そしてSSWrはそのことを急激な社会変化に伴う学校の揺れとも捉えていた。このことは社会と学校との関連の中で課題を捉え、社会が学校現場に与えている影響を意識していると考えられる。

また、その学校現場へのかかわりは、教育の視点にソーシャルワークの視点を重ねていくことであった。そして教師との協働を図り、教師・学校を子どもたちの環境と捉え、教師の視点や学校現場の変化、エンパワメントを促す取り組みを行っていた。

ソーシャルワーカーは、人と環境の交互作用に焦点を当ててアプローチをしていく専門職である(Carel B.Germain 1981)。本研究の結果は、そのことを裏付ける結果と考えられる。対象となる子どもを中心としながらも、学校の抱える課題を社会というマクロな視点で捉え、その学校を子どものメゾレベルの環境と捉え、働きかけることによって子どもの最善の利益を促してきたと考えられる。

このことは学校現場への新たなアプローチを示唆しているものである。SSWrには今後、学校現場で起きている子どもたちの様々な課題(ミクロレベル)を学校・社会(メゾ・マクロレベル)に返していく「問題の社会化」という役割が求められていると考える。

8. 本研究の限界と課題

本研究は、調査・分析者自身もSSWr経験者であった。そのことを考慮し、それについての客観性や中立性に関する検証はなされていない。しかし、そのことはインタビューの段階から調査対象者と調査・分析者間に共通の意識や共通言語があったことで有意に作用したとも考えられる。また、データの分析については限られた時間の中で取り組んできた。今後、データと対話し、データ間の関連性をさらに精査することでさらに新たな知見が得られる可能性もある。さらに、本研究は熊本県というごく限られた地域での実践を般化したものである。これらについては現時点での本研究の限界であり、今後の課題としたい。

謝 辞

本研究は、10名の現任SSWrに快くインタビューへの承諾を頂き、それへの丁寧な応答があり、質の高いデータが得られた結果から生み出されたものである。心からお礼を申し上げたい。また、この分析の中で極めて内容のある、質の高いSSWrの実践を明らかにすることができた。これは、熊本県におけるソーシャルワーカーの専門職団体(熊本県社会福祉士会、熊本県精神保健福祉士協会)の強力な支援の下、熊本県教育委員会に経験豊かな専門職がSSWrとして採用され、円滑に活動してこられたことの表れでもある。関係された全ての方々へ感謝の意を表し、本論考を閉じたい。

(本研究は2010年に刊行された『熊本県におけるスクールソーシャルワーク実践に関する調査研究・活動報告書』の一部に加筆修正を行い、再構成したものである。)

注・参考文献

- ¹ 歴史的には、高知県に1949年に配属された訪問教師を福祉教諭として学校福祉事業の始点とする位置付けや、その後1956年に熊本短期大学の内田守による熊本市白川小学校を学校社会事業指定校としたモデル的な実践が展開されている(内田2008)。また1961年には、労働者の町と言われる大阪釜ヶ崎に不就学児のための学校が設立され、囑託として学校ケースワーカーが任命されている(勝西2007)など、わずかな取り組みは行われてきた。
- ² ミクロ、メゾ、マクロの3つのレベルである。山野は、スクールソーシャルワークの機能と役割として、エコロジカルな理論を基にミクロ、メゾ、マクロの3つのレベルでのマネジメント機能が等しく重要であるとした(山野2006b)。

引用・参考文献

- 内田宏明(2008)「日本におけるスクールソーシャルワーク前史」日本スクールソーシャルワーク協会編『スクールソーシャルワーク論—歴史・理論・実践—』学苑社、37-50。
- 萱間真美(2007)『質的研究実践ノート—研究プロセスを進めるclueとポイント—』医学書院。
- 勝西恭子(2007)「スクールソーシャルワーク前身の取り組み」山野則子・峯本耕治編著『スクール

- ソーシャルワークの可能性 学校と福祉の協働・大阪からの発信』ミネルヴァ書房, 31-35
- 門田光司 (2010) 『学校ソーシャルワーク実践 国際動向とわが国での展開』ミネルヴァ書房, 99
- 西野 緑 (2008) 「虐待的養育環境にある子どもに対するスクールソーシャルワーク実践モデルの開発的研究—M-GTA の分析によるコーディネーターの援助プロセス—」『子ども家庭福祉学』 8, 11-21
- 西野 緑 (2009) 「配置校型スクールソーシャルワーカーの有用性と課題—虐待的養育環境にある子どもに対するスクールソーシャルワーカーの援助プロセスを通して—」『学校ソーシャルワーク研究』 4, 28-40
- 浜田知美 (2005) 「香川県におけるスクールソーシャルワーク活動」日本スクールソーシャルワーク協会編『スクールソーシャルワークの展開—20人の活動報告—』学苑社, 25-32
- 濱田博文 (1993) 「学校教育の社会的機能」小島弘道編著『学校教育の基礎知識』協同出版, 50-63
- 半羽利美佳 (2006) 「アメリカにおけるスクールソーシャルワークの現状と課題—“host settings”での実践を通して—」『ソーシャルワーク研究』 32 (2), 14-19
- 半羽利美佳 (2008) 「学校ソーシャルワークの歴史」日本学校ソーシャルワーク学会編集『スクールソーシャルワーカー養成テキスト』中央法規, 14-17
- 久富善之 (1995) 「教師のバーンアウト (燃え尽き) と『自己犠牲』的教師像の今日的転換：日本の教員文化・その実証的研究 (5)」『一橋大学研究年報。社会学研究』 34, 3-42
- 水本徳明 (1993) 「学校教育の制度原理」小島弘道編著『学校教育の基礎知識』協同出版, 11-24
- 山下英三郎 (2003a) 『スクールソーシャルワーカー学校における新たな子ども支援システム—』学苑社, 113-152
- 山下英三郎 (2003b) 前掲書, 9-10
- 山野則子 (2006a) 「子ども家庭相談体制におけるスクールソーシャルワーク構築—教育行政とのコラボレーション—」『ソーシャルワーク研究』 32 (2), 29
- 山野則子 (2006b) 前掲書, 28
- 山野則子 (2009) 「大阪府の取り組み状況」『学校ソーシャルワーク研究』特集号, 34-35
- Germain, C. B. (1981) The ecological approach to people-environment transaction. *Social Casework*, 61 (6) The Family Service Association of America 323-331 (= 小島蓉子編訳・著『エコロジカル・ソーシャルワーク カレル・ジャーマイン名論文集』学苑社, 101-127)
- Flick, U. (1995) QUALITATIVE FORSCHUNG 小田博志ほか訳 (2002) 『質的研究入門—人間の科学—のための方法論—』春秋社。

(2011. 2. 28 受稿, 2011. 3. 25 受理)

A practical analysis of the perceptions of school social workers in school environments

Yasushi IWANAGA & Takuya CHAYAMICHI

This research regards school social workers (hereafter referred to as SSWr) introduced into a school site within the social welfare profession to define the school site, and to understand what practical knowledge and technology had been used. Individual interviews (semi-structured interviews) had been conducted with 10 people in the SSWr field, and the results were analyzed according to the qualitative research method. As a result, the core concepts of the aspects of the education and welfare, culture and a sense of values of the education organization, the teachers' low salaries, the impact of the support from the organization, the role of a rapid societal change and the school, and systems of school social work activities were identified from the "perceptions of SSWr in the school site". The core concepts that tell of the cooperation of staff with the teacher, the teacher and school as first client, a grasp of the situation on the campus as a social resource, and social work, the shared role of the assessment, counseling skills, and social work practical knowledge and technology that become the basis of "Practical knowledge and technology of SSWr in regards to the school site" have been analyzed. It was clarified that, based on these characteristics and challenges for the SSWr schools, involvement from the perspective of cooperation, SSWr urged the change and the strengthening of the school site in terms of the children's environment will be repeated in view of was.

Key words: School social workers, School site, Practice wisdom and technology, Qualitative study